# 寝床屋の無料配布

・小者の辛労　……　3

「ちょいと、旦那」
夕闇の濃くなる刻限。深川の町屋が立ち並ぶあたりで、婀娜な声が掛かる。
「オヤオヤ。旦那たァ、ご大層だ。姐さんが呼んだナァ、オレかェ？」
周りにはムロしか歩いていない。判り切っていても聞くのが手管ってェ奴だ。
「そうサ。旦那しきゃ歩いてないものを。他の誰に声を掛けるってェのサ。ハハァ、読めた読めた。もう誰ぞ良い子が首を長くしてお待ちなんだろう。こんなはすっぱなんぞ、相手にしちゃァいられねェってェヤツだ。エエ、憎らしい」
「コレサ、そうじゃァねぇヨ。ご丁寧にありがてぇこったが、普段旦那のだの字も呼ばれもしねェのサ。勘違いするのも恥ずかしいから聞いたまでヨ」
ムロの答えに、黒い羽織、鼠色の地に黒の縞模様の着物を着て、風呂敷に包んだ三味線を持った芸者がうふふ、と笑う。
「エエ、語るも情けない話だが、マァ、聞いておくれな。お馴染みさんがちょいと顔

を出しておくれと仰るからサ。なにくれと世話になってる旦那のお呼びだ、いかざァなるめェ、と駆けつけてみりゃァ、奥方が座敷で仁王立ちさネ。付き合いもあれば、息抜きも必要だろうと目を瞑っちゃァいたが、遊びも過ぎればお家のためにならぬと大層お怒りでネ。閻魔様も裸足で逃げ出す手合いヨ。ナニ、奥方を放っておいて粋筋の妾かと疑っておいでだったってェワケ。折角の座敷にすげなく袖にされたこの辰巳芸者の美祢吉(みねきち)。哀れとお思いなら、わちきを座敷に呼んでおくれじゃァないかェ？」

そう言って、明らかに三味線や謡よりも、別の目的を匂わせるような色香を振りまきながら、芸者がムロの腕にそっと縋った。

そりゃ、こんな意気地の女に酌をしてもらって、三味線をつま弾きながら端唄の一つでも歌った貰ったら、どれだけ美味い酒が飲めることか。ムロはデレデレと鼻の下を伸ばしながら、酒手も芸者に払う金もないがこれは御用のためだ、と自分に言い訳をする。

ムロは、北町奉行所は定町周り同心、河野鯉太郎の下で働く小者だ。

小者とは、同心が使う個人的な部下のようなもので、同心の代わりに所謂後ろ暗い背景を持つ人々を探る人員である。御用の内容は色々あるが、盗賊や殺人などの下手

人を調べることがほとんどである。したがって当然ながら、ムロの前身も泥棒だ。餅は餅屋、というワケである。

飢えに堪えかねて、八丁堀の同心長屋、河野の家に盗みに入ったのが運の尽き。命永らえる代わりに、同業の様子を売る狗になりさがったのだ。

そんなムロは、主人である河野から、とある命を受けていた。大所帯を仕切る悪党の次の狙いがどこか、繋がっているかもしれない芸者や岡場所の女郎に当たろうとしていたところだ。芸者の方から声を掛けて来てくれて、渡りに船と飛び上がって喜びたいところだ。

「おや。えー、そうだそうだ。オメェ、三郎じゃねぇか」

そりゃもう、願ってもねぇ、と返答をしようと口を開いたところで、男の陽気な声が掛かって、ムロはムッとした顔で背後を見た。一応オレァ、御用の最中なんだよ。

「オヤ。旦那、三郎ってェ仰るのかェ？」

女が紅を塗った唇をにぃ、と釣り上げた。まさか、三郎なんて名前じゃない。絶対呼ばれたくない名前で呼ぶ奴ァ、一体ェ誰だ！

振り返った先にいたのは、火附盗賊改の与力、窪塚だった。今日は単衣も髷も崩し

た遊冶郎のナリをしている。
「あんた、ひつ……！　じゃねぇ、より……っ！　でもなくて、ええと、く……！」
火附盗賊も与力も、窪塚も言ってはならぬ。義理立てする相手ではないが、脛に傷持つ身だからこそ、御用のために働くムロとしては、町奉行も火附盗賊も逆らってはならない相手であることは同じだ。
「おいおい、俺の名前忘れちまうなんて、酷ェなぁ。なぁ、姐さん？」
「オヤオヤ。旦那ァ、あちこちに付き合いがおありのご様子とは大した御仁じゃァないかェ。憎らしいネェ」
窪塚の言葉に、美祢吉と名乗った芸者が流し目をしてうふふ、と笑う。
チョッ。芸者もこの与力様にゃァ転ぶってェワケか。ムロは腹の中で舌打ちをする。
さっきまで座敷に振られた今宵の稼ぎを、わずかでも取り戻そうと、ムロから少ないながらもどれだけ毟り取れるか算段していたというのに。今は窪塚にのぼせたような目付きで秋波を送る。窪塚が誘えば座敷にも、臥所にだってついて行くだろう。
まぁ、偉丈夫と形容しても差し支えない容姿だから、仕方あるまい。対してムロなんぞは貧相で草臥れた男なのだから。

「こんなとこでお会いするたァ、珍しいこって…」
ムロは完全な愛想笑いを浮かべて後退りする。雇い主と言うか、彼の命を握る主人から任された探索は、別の標的を探さねばならなそうだ。
「兄ィ、ここでお目もじしたのも、何かのご縁。ちょいとお付き合い願いてェのヨ」
ニヤリ、と凄みのある笑みを浮かべて、窪塚ががしり、とムロの肩を掴み、抵抗するまもなく首を万力のような力で締め上げてくる。
「ちょ……」
首が締まる、首が締まる！　なんてェバカ力だェ。ムロは窪塚の腕を勘弁、と叩く。
「そうか、兄ィも俺に会えて嬉しいってか」
かはははは！　とわざとらしすぎるほどに呵々大笑しながら、窪塚がムロの首を絞めたままズルズルと移動を始めようとする。引きずられるムロは、地面に擦れる足が痛くて、ヨレヨレと足を踏み出す。
「それなら良い店があるよ。この美祢吉さんに万事お任せナ」
どうあっても今宵の稼ぎを少しばかりでも埋めなきゃならんと目論んだのか、あわよくば窪塚と懇ろになり、太客として捕まえようと企んだか、舌なめずりせんばかり

の勢いで、美祢吉が先導を切って歩き始めようとするところを、窪塚が押し留めた。
「ならねぇならねぇ。こっから先は女人禁制だ」
「コレサ、髪でも下ろそうって話じゃぁあるまいに。旦那方じゃァ仏様の功徳もおえねェ、飛んだ生臭で仕舞いだろうにヨ」
「コレハコレハ。拙僧らの求道心を疑うとは心外じゃ。ナニ、男同士の大事な話ってヤツだ。すまねぇが、勘弁しつくンネェ」
「な……っ！　エエ、好かねぇ！」
窪塚がムロをグイグイと押しやりながら、追い縋る芸者から距離をとる。
「いずれ座敷に呼びにやらァ」
「もう！」
美祢吉の怒りの声を背に受けながら、ムロは男とサシの飲みなんて冗談じゃないと、腹の中で悪態をついた。
「まぁ、一杯」
そう言われてチロリを差し出されても、ムロは盃を取る気にはなれなかった。

ムロの居心地悪そうな、困ったような、ムッと拗ねたような、怒ったような顔を見ると、窪塚はニヤッと笑って勝手にムロの盃に酒を注ぎ、板張りの座敷に用意された手塩皿の隣に置いた。そして、自分にも手酌で酒を注ぐと、くっと飲み干して口を開く。

「あの姐さんじゃ、けつの毛まで毟られて終わりだぜ、三郎」

そう言って窪塚は肴に出た雷こんにゃくを摘まみ、ぽいと口へ放り込んだ。

「テメェから毟られに行く気だったのサ。邪魔だてご苦労さん。大いに嬉しくって涙が出らァ」

大人気ないなぁ、と自分でも思いながらムロはそっぽを向く。向いた先に障子の空いた窓でも有ればまだ格好がつくが、残念ながら粗末な尻かけ飲み屋だ。茶色く変色して端が千切れた「下り酒　上々」の張り紙がくったりと壁から垂れているのしか見えない。

「そいつァ、すまねぇことをした」

今の一言で、ムロが何かを探っているのを汲んでくれたのだろう。窪塚がペコリと頭を下げたのには心底驚いた。与力が一介の小者に頭を下げるなんて、見たことも聞いたこともない。しかも、ムロの主人は、窪塚の部下ですらない。

与力らしからぬ与力だと言う噂を聞いたことはあった。けれど、ここまでとは思いもよらなかった。
「……しかし、あの姐さんってことは、北もようやく動いたか」
下げた頭も上げぬうちに、ボソリとそう呟くのを聞くに至っては、腹立たしいと言うより呆れてなんだかおかしくなってしまう。
「で、話ってなァ、なんです？」
となれば、遠慮するのも勿体ない。ムロは窪塚が注いだ酒を飲むと、更に手酌で二杯立て続けに飲み干す。
「それだ。話が早くて助かるぜ、三郎」
「三郎って呼ぶなァ止してくンなせぇヨ」
河野の小物になった途端に、三郎と呼ばれるようになったのだ。そのワケは、河野家には亡くなった長男太郎、そして主人であり次男である次郎がいたからだ。太郎、次郎なら当然三郎であると、さっぱりわからない理屈に、今でもムロは賛同しかねる。って言うか、みんなそれでいいのか？　ちょいとおかしいんじゃねぇのか？
今では、隣近所は当然ながら、河野の親戚にまで三郎と呼ばれる始末。

「ナニ、お前の本名を呼ぶわけにゃいかねェだろ。それとも、テメェにゃ傷もなけりゃ、ホコリもたたねぇのかェ？」
ぐい、と顔を寄せて、窪塚がそう言う。その通りで、ムロは流石に黙る。まぁ、厳密に言えば「ムロ」ですら本当の名前ではない。と言うよりそもそもテメェの名前なぞ知らないのだ。勝手に誰かがつけた物をそのままにしているだけである。
わずか数文を手にしては糊口を凌いでいたコソ泥のムロでも、流石に後ろ暗い連中との繋がりを持っている。だからこそ小者として僅かながらも役に立っているとも言える。
それを考えて、河野が三郎と呼ぶようになったのかと思うと、流石に有難いとも思う。が、あっという間に隣近所から親戚まで、当然のように三郎と呼び始めるのは、町方の同心の関係者とはいえ、流石にお気楽に過ぎるのではないだろうか、と思わなくもない。
「話ってなァ、他でもねぇ。お前が追ってる例の話だ。判ったことをこっちにも流してもらいてェのサ」
火附盗賊改と町奉行は探索範囲が重なっているばかりか、火附盗賊改は町方が手を

出せない寺社地にも入り込んで捕縛が出来るため、犬猿の仲なのだ。
コソ泥だった身からすればどちらも警戒すべき相手だし、一方で非道な賊がいなくなるなら、どちらが手柄を立てようとどうでもいい話だ。
無茶苦茶な要求は町方でも火附盗賊改でも大して変わらないだろう。小者と言っても、河野が個人的に鑑札をくれただけで、基本的にはなんの保証もない立場だ。小者、目明し、手下などと言うのは、言い方が違うだけで、全て同心の私的な手足のことだ。複数の同心のために動いている者だっている。ムロがそうしていけない理由がどこにあるだろう。
「旦那方に乗り換えろと？」
「いや、別にいらん」
少し緊張しながらの問いを言下に拒否されて、ムロも流石にムッとする。ちっとは考えてみるフリでもしてみろってンだヨ。
「いいか、俺たちは別にお前ェさんの旦那方と揉めたいワケじゃねェ。だが、一刻も早く下手人は押さえてェ。お前ェさんたちの手に追えねぇことになった時には、即座にこっちが動かなきゃならねぇ。だから、知るべきことは知っておきてぇ、そう言う

ことだ」
どうだ？　と自信満々に理を説いてみせる窪塚に、ムロは素直にうんとは言いたくなかった。
「良いとこだけ持ってくつもりなら、他ィ当たっつくンねェナ。こっちだって別に旦那に義理立てするわけでもねェし、脛に傷がねェワケでもねェ。だが、アンタがやらせようとしてンなァ、タダ働きの上に裏切れってことばかりじゃァねぇ。オレ達が持ってるなァ、誰かの手下や目明しが手前ェの寿命削って得たネタだ。見返りもなにもねェのにそいつを寄越せと言われて、そうですかと渡せるもんじゃァねぇや。お役人てェのを嵩にきりゃオレ達が従うと思ってンなら、大間違いも良いとこだぜ」
ムロはそう啖呵を切った。
――いや、嘘だ。
そう啖呵を切りたかった。自分たち下っ端がどれだけの危険に命を晒し、危うい綱渡りをしながら役目を果たしていると思う。自分たちをそこまで軽視して良いと思っているのか。そんな働きは、直属の主人にだって滅多に認めては貰えないものだ。それでも、何某かはその働きに報いてもらっている……はずだ。それを、横取りしてい

くような真似を許すと思っているのだろうか。そう思うムロの気持ちは間違っているとは言えないだろう。

それなのに、ムロは一言も自分の思いを訴えることが出来なかった。

窪塚は手のひらで盃を弄びながら、ムロをねめつけていた。その、男が湯気のように頻りと立ち昇らせている気迫が――。

「エエ？　どうだ、合点か」

ムロの首筋をがっしりと掴むと、迫力のある声で言う。それだけで、ムロはぞわりと全身が粟立つのを感じた。

おっかねぇ。

ムロが感じたのはそれだ。ただ、その一言だ。

座敷に座っているのに、ガタガタと体が震える。バクバクと心臓がうるさくなり、どっと冷や汗が噴き出て、血の気がすう、と引いていく。

これまで多少なりとも悪い奴らと付き合があった。その中には、どうやっても逆らえない怖い存在というのがいた。ムロにとっては大抵の連中が怖いのだが、いざとなれば逃げられる。だが、特別に怖い存在と言うのは、まず逃げようと言う気が起こら

ない。というか、逃げられない。何か僅かでも機嫌を損ねればあっという間にこの世とおさらばすることになる、と言う事実を本能で悟って、ガチガチに緊張して満足な受け答えすら出来なくなるくらいなのだ。

そう言う手合いは、見ればわかる。いついかなる時でも、襖を挟んだ別の座敷からでも判るほど、そんな空気を駄々洩れにしているからだ。

だが、窪塚は判らなかった。

だから、火附盗賊改の与力が、こんな恐ろしい姿を表すなんて、思いもよらなかった。

そして、今、理解した。

もっと恐ろしいヤツは、初見で恐ろしいと悟らせないのだ。これまで知らなかったのが良かったのか、悪かったのか。

「じゃ、頼んだぜ」

ムロが反応できないうちに、窪塚はそれを諾と受け取ったのか、ばしんばしん、と肩を勢い良く叩いて、居酒屋を出て行った。

その叩かれた肩は二、三日腫れ上がって動かすのが難儀だった。あの野郎、許さねぇ。

ついでに、居酒屋の飲み代も払わずに出ていきやがった。窪塚、許さねぇ。

ムロは、心の中だけで威勢のいい啖呵を切って、悔しさを紛らわせるしかなかった。

「おい、さぶろぉー」

座敷から酔っぱらった声が聞こえる。

ムロはすでにその声を二度、無視している。そして三度目は、向こう三軒に聞こえるほどの大声になっていた。明日も小うるさい両隣に挨拶して回らねばならない。またネチネチとした嫌味を聞かなきゃならないのかと思うと気が重い。

北町が追っていた悪党は、有体に言うと逃した。ムロが声を掛けた女芸者は、図らずも北町が捕らえようとしていた相手に本当に繋がっていたらしい。ムロが声を掛けたからか、窪塚のせいか、それとも他の手下の誰かか。ともかく何か怪しいと感づいた女芸者から注進でもあったのだろう。北町が出ようかと腰を上げたころには、とっくに寺社領へ逃げ込んでしまった。町方が歯噛みしている間に、それっとおっとり刀で押し出した火附盗賊改が、疾風もかくやと言う勢いで捕縛してしまった。

ムロの主人と、その仲間である北町の三羽烏の面々は、その悔しさを酒で晴らしていると言うわけだ。

「さぶろぉー、酒だ、酒！」
「そうだぁ、さけもってこーい！」
ムロはちっ、と舌打ちをすると、酒精が吹っ飛ぶほどに熱く燗のついた酒を座敷に運んでいく。こいつでもかっ食らって、火傷しちまえ。
座敷は想定よりも大人しい状況だった。ここまで酔いどれていれば、泣いたり、殴る蹴るの喧嘩が始まって、小鉢やら酒やらがひっくり返って、もっと座敷が汚れていても不思議ではなかったからだ。
その代わり、河野、長瀬、高井の三人が神妙に正座して、膝の上に置いた手で袴を引き千切らんばかりに握りしめ、滂沱の涙を流していた。ムロはその姿を見ただけで、厄介な場へ来たと後悔する。時に彼らは芝居がかったような行動を取ることがある。河野の母が芝居好きだからだろうか？　ともあれ、この状況はなにが起こるのか判らないが、長居は無用だ。面倒なことになりかねない。
ムロは恐る恐る徳利を座敷に置いて、空いた徳利を手早くかき集めると座敷を去ろうとする。
「さぶろー」

呂律の回らない、それでも神妙な声で呼びかけられる。
「なんです」
ムロは勘弁してくれ、と思いながら答えると、河野が座れ、と座敷を指さす。ずる、と高井が鼻を啜るのに、長瀬がくしゃくしゃになった鼻紙を差し出した。ムロは渋々と座敷の入り口近くに座る。
「此度の仕儀、どう思う」
「へぇ、どう……とは？」
これだけ酒を呑んでおいて、いきなりしゃきっとした言葉遣いになる時は、大抵深酔いしているのだ。河野の母もそうだったし、これまでも何度かあったので、もうこれは河野の血に違いない。全くはた迷惑なものだ。それに振り回される身になってみやがれ。
「どう、とは……っ！　どうとは……っ！　あの！　火附盗賊改に手柄を持っていかれたことだっ……！」
憤った言葉も途中で、大量の涙と鼻水に、唾を飛ばして怪しげな呂律に変わる。
「寺に逃げ込まれちまったんじゃァ、町方じゃ手を出せねぇでしょう」

「それは百も承知だ！」
河野達が声を揃えて怒鳴る。その勢いで、長屋の梁がびりびりと鳴る。とんだ土間声だ。それに承知なら聞かないでほしい。一方の河野達は言葉にしたことで更に現実が身に沁みたのか、鼻水と涎を垂らしながら大号泣していた。
――ああ、ムリだな。
ムロは唐突に悟る。そして、その考えがすとん、と納得できてしまった。
河野達のこの醜態に散々付き合わされ、挙句老母のお小言に、隣近所からの当て擦りを聞かされる毎日である。御用の向きで探るのだって、その間にこなさなければならない。その上で腹の中で舌を出しながら火附盗賊改の旦那にも尻尾を振るなんざ、所詮はコソ泥であるムロには手一杯に過ぎる。
折角なら、町方と火附盗賊改の両方から美味しいところだけを貰えたら、なんてことも考えたが、どうやっても自分が上手く立ち回れるとは思えなかった。そんな器用な真似は知略だか姦計だかが得意なヤツのすることだ。ムロなぞ、調子に乗ってその内とんでもないボロをだすのがオチである。
旦那方の前でやったなら、最悪その場で即斬られるだろう。あるいは牢屋に叩き込

まれるかだ。
だが、それをどこぞのお尋ね者の前でやらかしてしまったら。
――ぞっとしねェぜ。
ムロがその場で殺されるのは間違いない。所詮は拾われた命。痛いのは嫌だがそれでもいい。問題はそれで大勢の人が巻き添えになることだ。
もともとがケチなコソ泥である。それでも、理不尽に人が殺されるのは嫌だった。自分が数文程度の盗みを繰り返すより、『町方の狗』になることでいくらかでも悪党の手で傷つく人が減るなら、と小者になることを承知したのだ。もちろん、小者にならなければこの場で斬る、と河野に言われたからでもあるのだが。ていうか、命を失う事の方がイヤだったので承知せざるを得なかったわけであるけれども。
――大それたことはしねェのが、生き延びるコツだ。
ケチで、卑怯で、いくじなしで、不器用で結構。無茶なんぞするものじゃない。火附盗賊改にゃ悪いが、こちらから進んで話をするこたァねぇ。大方ムロならばチョロくて御しやすいとでも思ったのだろう。窪塚がしびれを切らしてネタァ寄越せとでも脅してきたら、震えあがって知ってることを話せば良い。

むしろムロがやらなくても、きっともっと器用で野心にあふれた誰かや、義侠心やら正義に滾った誰ぞが進んでやっているだろう。

ムロはスッキリした思いで、一つ、うん、と頷く。座敷を見れば、号泣していた河野達はいつの間にやら大いびきをかいて寝てしまっている。ムロは座敷に出ていた料理と酒を片づけてしまうと、自分にあてがわれた座敷――といっても台所横にある納屋のようなものだが――で布団に潜り込んだ。

割り切って納得してしまったからか、明日に待ち構えている挨拶廻りを思い悩み呪詛のような文句をブツブツ言うこともなく、すとん、と眠りに落ちたのだった。

もちろん翌朝、両隣の住人からは辟易するほどに長い説教と嫌味を食らい、珍しく二日酔いで悩む河野の八つ当たりにムッとしながら、昨日の決断は早まったかと思った。だがそれでもやはりそんな器用な真似ができるわけもなく。ムロは浮かれた夢でも見たような気持ちで、窪塚と出会ったことを思い出すのであった。

――了

0919# エアブー GOOD2021

# 寝床屋の無料配布

2021/09/19 刊
URL: http://wwbtd.mods.jp/nedocoya/
Mail: nedocoya@gmail.com
Twitter: @nedocoya4pr

ようこそお出で下さいました。
この度はお手に取っていただき有り難うございます。

ムロは、同心やら周りの人に散々振り回されている、
結構損な役回りの人です。
この不憫な人は、腹の中でずっと色々文句を言って
います。なので地の文がものすごく多くなると言う
弊害が発生しました。
ただでさえ会話文少ないのに……（汗

寝床屋は、江戸時代を中心にあんまり剣豪とかが
出てこないお話を、番頭さんことかわなをと、
丁稚こと扇坊の二人で書いております。

少しでも楽しんでいただければ幸いです。

# ＊おねがいとおことわり＊

本書について、以下の行為はご遠慮くださいますようお願いいたします。

・有償無償を問わず、本書の内容を、ご自分の作成物として一部、または全てを再配布する行為。

・本書を有償にて再配布する行為。

本書の内容は今後の頒布物に収録される場合があります。また、その際にサイトでの掲載を取りやめる場合がございますので、予めご了承くださいませ。

本書は無料配布として作成したものです。